

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

萩原 悠太

主論文の題目

題目 Impact of life and Family Background on Delayed Presentation to Hospital in Acute Stroke

(急性期脳卒中患者の受診遅延における家庭環境の影響)

および

掲載・審査委員名

掲載誌 Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases(in press)

主査 平 泰彦

副査 松田 隆秀

副査 田中 雄一郎

[論文の要旨・価値]

(背景) 本邦は高齢化社会で、その度合いは増している。現在、脳卒中患者 300 万人をかかえ、さらに毎年 30 万人が新たに発症し、脳卒中は第 4 の死亡原因である。脳卒中の 70%を占める脳梗塞には、発症 4.5 時間以内の超急性期血栓溶解療法 (t-PA) が明確な証拠をもって転帰改善を示す治療法として確立している。聖マリアンナ神経内科講座では脳卒中早期発見スケールとして MPSS を開発・普及させ脳卒中の治療成績向上に大きく貢献している。その結果、この 4 年間で脳卒中覚知一病着時間は 3.6 分短縮させたが、一方発症一病着までの時間は逆に延長している。著者はこの原因を患者の家庭環境にあると推定し、当院の症例で検討した。

(対象、方法) 2009 年の 12 か月間に当院で経験した 253 例の脳卒中患者を対象とし、早期受診群 (発症から 3 時間以内受診)、遅延受診群 (発症から 3 時間を超えた受診群) の 2 群に分け、家庭環境、発症時間帯、他院経由の有無、などを説明変数として解析した。さらに家庭環境を①2 人とも 65 歳以上 (高齢)、②どちらかが 65 歳以上、③2 人とも 65 歳未満、④独居、⑤3 人以上に分類した。

(結果) 遅延受診の因子として夜間発症、他院経由、独居があることは他の報告と一致した。これに加えて 2 人とも 65 歳以上 (老老家庭) という家庭環境が遅延受診に寄与する独立因子であった。

(考察) 本研究は、高齢化社会にある本邦において、65 歳以上の 2 人暮らし (老老家庭) が脳卒中の遅延受診の因子であることを初めて明らかにした。発症一病着の時間短縮の方策として、特に高齢 2 人暮らし家庭において脳卒中という病態の理解の普及、そして救急要請を躊躇しないという啓発活動を行うべきである。

(価値) 本研究は治療法が確立している脳梗塞の早期受診率と治療効果の向上にむけて、高齢者 2 人の家庭環境が大きな要因であることを初めて明らかにした。高齢化社会という本邦の現状で脳卒中への対策として本研究の意義は大であり、学位授与に値する。

[審査概要]

松田教授、田中教授、平が審査をおこない、そして指導の長谷川指導教授が陪席された。PC による発表の後、質疑応答を行った。覚知一病着時間が短縮された原因、t-PA 適応が 4.5 時間へ延長された理由、発症時間の決定法、発症一病着時間の短縮を目指すための方策などが論議され、萩原君は概ね適切に回答し、要に応じた補足説明をおこなった。関連英語論文により英語能力を試験し、十分な英語力をもつと判断した。

(最終) 試験結果の要旨

[研究能力・学識等]

1) 専門的知識

脳卒中の専門的知識、および疫学上の問題点などに精通し、十分な知識をもっている。

2) 研究能力

覚醒—病着が時間短縮されている一方、発症—病着時間の延長という現象を、実医療の経験の中から抽出した。さらに、その問題点や原因を整理し、自ら仮説を設定し、そのうえで疫学調査を企画して仮説を証明した。これらを教授の指導も受けながら、自らがこの研究を立案、実行したことは萩原君の研究能力の質を保証する。

3) 発表能力

本研究成果を海外の学会で発表した。また学位審査では聴衆に解りやすい、語りかけるような口演で、適切で明快な発表であった。スライドもわかりやすく作成されていた。

4) 研究意欲

本研究の結果である、65歳以上2人家庭（老老家庭）における脳卒中の早期受診を促すべく、啓蒙活動の実践など次の方策を考えており、今後の研究意欲も十分である判断した。

5) 態度・人柄

発表、質疑応答をとおして、終始、真摯でまじめな対応であった。人柄も高く評価された。